

## 雪女⑥

(1) 「くるか、えーい」 見せ物小屋にあればこんだ銀次は、うってかかる男たちを十手であべこべにたたきのしました。女ツナワタリのオソノは

(2) 「ちくしょう、よくもかぎつけてきたね。生かしてはかえさないよ」と、短刀をぬいて向かってきます。「よしな、雪女の正体はお前さんだとわかってるんだ」

(3) 「えーい」「あーっ」とびこんでいって、オソノのもった短刀をなんなくうちおとした銀次は、雪女がおとしていったオマモリブクロをだして

(4) 「これはお前さんのものだろう。お前はこの江戸のうまれだが、何でニセモノの太夫になんかなって、旗本の村杉をねらったんだ。わけを話してみないか」

(5) 「村杉をころしにいつて居なかったので子供をさらったが、かあいいので杉村のかわりにころすことができず、この小屋にかくしてあることはちゃんとわかっているんだ」いわれてオソノは「すみません。じつは」

(6) 「私の父が今から十五年前に村杉にブレイうちにされたのです。侍にころされれば町人はしかえしもできず、ころした村杉はツミにもならないのがくやしくて、カタキウチをしようとねらっていたのです」

(7) 「オソノさん、カタキウチはやめなさい。侍がいばっている今の世の中がわるいんだ。そこへ一人くらいころしたって何にもなりはしない。子供さえかえれば、こっちはそれでいいんだよ」「はい、わかりました」

(8) 銀次は村杉に子供をかえして「わけも何もいえません。雪女はきえていきましたよ」と話しました。「フームそうか、すまなかった。銀次、礼をいうぞ」

(9) いつか朝になっていました。「竹や、これからかえって朝湯にはいってぐっすりねるとしようか」「へへ、そうしましょう。事件が片づいたんですからね」(全巻のおわり)